

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ヘミングウェイ 『老人と海』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 69 回のツイキャス読書会の課題図書は、ヘミングウェイ 『老人と海』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『ライオンの夢』

漁師のサンチャゴは、年老いていて 84 日間も何も釣れないでいて、ろくに食べてない状況でも一人で漁に出て、すごい執念だなと思いました。

サンチャゴにとっては漁に出ることは生きているという証のようなもので、最後の最後まで漁に出るような人かもしれないなと思いました。

釣りをした事がない私は、このお話の内容で漁をする場面をちゃんと理解するのは難しいなと思いました。

サンチャゴは、時々アフリカの夢を見たり、ライオンのことを考えたりするのが、何でなのか不思議に思いました。

海と陸地に居るライオンとでは、全く正反対のように思ったからです。

漁の場面はなかなか思い浮かべるのが難しいけど、なぜかアフリカの草原で金色のたてがみを風になびかせるライオンは目に浮かびました。

ライオンは力強いイメージがあって、それはサンチャゴが老人で頬には皮膚がんを思わせるシミができていても、眼だけは海と同じ色をして不屈な正気をみなぎらせているとあるように、芯の部分では年老いていないという事なのかなと思いました。

少年のマノーリンは、とても優しくサンチャゴのために色々してあげる所はすごく微笑ましいなと読みながらホッコリしました。

サンチャゴの事を助けてあげながらも、尊敬している所もあり、マノーリンが優しい子だから助けてあげているというだけではなくて、きっと慕われる要素がサンチャゴにあるからだと思いました。

私もサンチャゴのように、若い人に慕って貰えるようなお婆ちゃんになりたいな。

そして、眠りながらライオンの夢を見たいなと思いました。

(おわり)

『老人と海』感想文

『老人と海』には、「スタンドバイミー」でも聴いて和らげたいやるせなさがあります。

作中では、老いの「痛み」が眩しく描かれ、そこは一を書いて百を、千を読ませる凄腕の作家、魂から魂にストレートに効いてきます。

とくに大物釣りの死闘は、困難な状態で自らの威厳のために最後まで闘う男の究極の誠実さみたいなものがあって、ボクシングを連想させ、一種の祈りの的なものを感じました。

ヘミングウェイは、何度も戦争や病気や事故を経験し、さまざまな恋に出会い、狩りや 釣り、酒に海に冒険を愛する、タフで優雅な文豪のイメージがありますが、一連の作品から垣間見えるのは、人間と人生の不条理に傷つき、人としての罪の意識に悩みながら、絶望的に自分を探し続けた繊細な男の魂でした。

「自分探し」とは本来、父なる神を世界の真ん中に打ち立てて、唯一の証人とする、自我だけが支えの、孤独で不安な魂の旅です。その旅路の果てに彼が選んだのが海でした。

それを敢えて「エルマーレ」ではなく「ラマーレ」だと呼ぶところに、一筋縄ではいかない、人生と女性に対する愛と敬意を見ます。

その海の上で「罪人なるわれらのために、今も臨終のときも祈り給え、エイメン」と、サンチャゴは アヴェ・マリアを唱えます。

美しかった大カジキは背びれと白い骨を残した残骸となり、そこに老いた男の姿が重なり、少年がそれを見て何度も泣いてくれますが、まさに「スタンドバイミー」的…です。

「遠出をしすぎたせいで、運を駄目にしてしまったのだろうか」のサンチャゴの言葉は、ヘミングウェイの人生を振り返る言葉、当時は体の痛みで精神が病んでいたとも言われます が、実は諦観に辿りつけない心を感じます。

サンチャゴが夢に見る浜辺のライオンは、みなが大好きなヘミングウェイのイメージ。

本人もそんな自分でいたかったのでしょう。

人生は罪を承知で夢を生きること、痛みだけが生きている証とは、きつい話です。

(おわり)

毎日が新しい日なんだ。

1950年代のアメリカがどのくらいの経済的成長の段階だったかを想像すると、この小説に流れるテーマは、「モノの消費」ばかりが加速する社会への批判を込めたものなのかなと感じた。

かつての栄光を誇りに生きてきた老人が、周りから「サラオ」と言われても、仕事を引退することなく毎日漁に出かける日常。

少しずつ自分の贅肉をそぎ落としてゆくアスリートのような人生観は最小限に守るべき精神だけで生きる、ミニマルな暮らしの理想形に見えた。

老人の言葉のなかで共感し、教訓にしたいフレーズがいくつもあった。

「毎日が新しい日なんだ。運がつくに越したことはない。」

「海上では、むだ口をきかないことが美德とされている、老人はそうあるべきだと考えていた。」

「その予感には口にはださない。なにかいいことをいうと、事はたいてい起らずじまいに終わるものだ。」

「たっぷり休んでいきな」と老人はいった、「そしたら陸のほうへ飛んでいきね、あとは万事あなたまかせにするんだ、人間だって鳥だって魚だって、みんなおなじことさ」

そして

「あらゆるものが、それぞれに、自分以外のあらゆるものを殺して生きているじゃないか。魚をとるってことは、おれを生かしてくれることだが、同時におれを殺しもあるんだ。いや、あの子がおれを生かしてくれているんだ、とかれは思いなおす。あんまり自分をだますようなことをいっちゃいけない。」

老人と少年の関係は、人間のあるべきミニマルな信頼が裏付いている。

そして「モノを消費する」だけの人生では虚しいばかり。

人を愛し、自然に抱かれる人生をまっとうできるように、自分ももう一度生活を見直さなくてはと思った。まずは、部屋の片付けからはじめ、そして信頼できる愛する友人をあらためて大切に想って行動してみよう。

老人と少年のような関係を、ひとつでもふたつでも築けるように。

(おわり)

「漁師」として生きる

サンチャゴは、「漁師」として生きた。巨大マグロとの格闘は彼の渾身の最後の漁になるかもしれない。最後の闘いを終えて人はいつか死ぬ。この世での出来事は、まるで蜃気楼のようにではないだろうか。大切なものは目に見えないのだから、この世の現象が無くなっても、恐れることはないのかもしれない。愛する海とも、愛する人とも別れて、いつかは動かぬ身体を横たえる。満ち足りたと同時に襲うこの虚しさをどう抱きしめたらいいのか。

命を賭して得た獲物を、鯨に食いちぎられていく時の彼の気持ちはどうだったろう。あれほど愛した究極の相手の身の証が、目の前で引き千切られ、血を流し、失せていくのだ。マグロと自分しか知り得ない出来事だというのに…。それは形あるものが持つ宿命とはいえ残酷だ。泣きたいくらいに残酷だ。では、戦わないことが賢明だったのか？いや、それでは彼は「漁師」ではない彼になる。「漁師」である彼が巨大なカジキマグロと出会うこと、それはマグロと格闘し獲得すること。たとえ相手か自分が死ぬことになってもだ。

たとえそれをこの世に痕跡として留めることが出来なくてもだ。「誇りをもってやつを殺したんだ」「罪なんかじゃない」とサンチャゴは言う。人が自らの有限性の限りで、本気で誰かを(何者かを)愛した時、「罪なんかじゃない」そう弁明して勇気をもって愛せば良いのではないだろうか。虚しさはある。寂しさもかなりある。だが、一縷の永遠性も..彼には残る...それが彼が「漁師」として生きた証と思いたい。

(おわり)

「一生現役」

老人は少し前は 1 ッ本釣りでの名の知れた存在で、他の漁師仲間からも尊敬されていた。少年は、小さい頃から彼に釣りの技術を学び、今では独りで収穫できるまでに成長した。少年は老人が好きで、老人が相手にされなくなっても老人の能力を信じ尊敬している。この二人の関係は、ほのぼのとしていて、私の心は暖かくなった。

老人は、釣れない日が続いても毎日漁に出た。彼が漁に出るのは、自分の力を信じていたからなのか、それとも老いを認めたくなかったからか、その両方の心情が話の流れの中で行ったり来たりして現れる。「ああ、あの子がいたら」というつぶやきは老いへの嘆きだし、「ライオン」が浮かんだり、巨大なカジキや襲ってくるサメに果敢に立ち向かう気力は自信から出ている行動に間違いない。私は老人の不屈の闘志に男らしさを感じた。この精神は一朝一夕に作られたものでなく、これまでの彼の努力と強い意志の賜物である。私はハラハラドキドキしながら、読み進めた。読み終わるまでに、最後まで諦めない精神力や漁獲の工夫に感心し、何度も彼の素晴らしい人間性に感動した。

しかし、そんな老人にも話の途中で、私は弱点を感じた。彼が認めたくない老いと孤独だ。特に、巨大カジキに向かって「おまえ」と呼びかける所を読んだ時に、その哀しみが感じられた。ここは一番心に残った場面だ。私は、老人はカジキを自分のように思っているに違いない、カジキが死ぬことは、自分が死ぬことと思っているに違いない、と想像して同情した。さらに、私は、彼はこの漁を最後に引退するかもしれないとさえ心配した。しかし、彼は違った。私の想像とは違った。

私の同情はいらぬ心配であった。彼は強かった。彼の心には「ライオン」がまだ存在していた。彼は、孤独も老いもはねつけるほど、たくましかった。「一生現役」で生きることができたら、どんなに素晴らしいだろう。私にはとても無理である。

(おわり)

『老人と海』読書感想文

私は、読みながらずっと老人は最後に死んでしまうのではないかと思っていた。なぜなら、魚との格闘が私の想像を絶するような過酷なものだったからだ。三日三晩全身にいつも「今あいつはこんな状態だ」と感じながら、水も不足し、生魚だけを食し、体の痛みでほとんど眠ることもできない。とてもじゃないけれど私だったら死んでいた。

老人は、「あいつ」となら一緒に死んでもいいと思っていた。老人は身一つで大海原に飲み込まれそうになりながらひたすら魚のけん引力だけを頼りに生きる旅路で、体も魂もすべて海と魚に捧げていたし、完全に「あいつ」と一体化していた。「あの子がいてくれたらなあ」ただひとつ、心に光る少年との日々を回顧しているうちに、突然ものすごい力で「あいつ」に引っ張られ、海に放り出されて死んでしまう。老人は海を女性と例えていたから、母なる海で死ねるのは本望かも知れない。

しかしそんな予想は裏切られ、老人は「あいつ」をとうとう仕留め、一緒に波に揺られながらの帰途でサメに襲われて「あいつ」を釣ったことを後悔しながらも、無事に港にたどり着いた。少年に再会できた。老人を心配していた少年はけなげに涙した。これまで老いぼれ爺さんを馬鹿にしていた港の猛者たちは、釣り上げた魚の骨を見て、あらためて老人の偉大さに気付く。そんなハッピーエンドだった。

ああ、それも素敵なお話かもしれないなあ……少年の涙にジーンときながら小説の終盤を迎えて、ようやく「あいつ」が「マカジキ」だと分かった。私は、魚はカジキマグロじゃないかなあとうすうす思っていたので、嬉しかった。ネットにマカジキの骨の画像があったけれど、骨だけでも芸術的だ。飛び跳ねる姿の写真なんて、ものすごくカッコいい！本物に出会いたいなあ。たくさんの美しいものに触れることができ、心躍る読書体験だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「老人と少年」

子供のころ、「老人と海」をマンガ版で読んだことがある。本当のところ、当時はあまり感心しなかった。魚や鮫との戦いを描いたシーンには多少集中できたし、まるで三国志の戦闘を見ているような気さえした。しかし、最後まで読んで結局何を言いたいのかが分からなかった。だから大学生になった今となっては読んだらどう印象が違おうかと気になった。

実を言うと、今回読んで新たな発見をしたとか、深読みできた訳ではない。でも一つ思い浮かんだことがあるので、それについて語ることにしよう。

私は老人と少年は結局同一人物ではないかと思う。二重人格や幻影なんかを言っているのではなく、少年が老人の過去で、老人が少年の未来ではないかということである。老人と少年は長い付き合いで、少年は老人から海や漁について教わった。二人は航海の思い出を全く共有しているし、遠慮のない間柄である。(また、私が読んだ青空文庫版の場合、お互いタメ口で話している) 少年にとって老人は英雄であり、老人にとって少年は気の置けない友である。しかし、不思議にもふたりはお互いへ何も干渉しないし、かえって各々へんな茶番を広げたりしている。彼らはもう何もかもお互いについて分かっている、お互いのプライドを傷つけたり、コントロールしようとはしない。

私はこれが少年と老人の時間が繋がっているからではないかと考える。最後に少年が老人の怪我を見て泣くのは、彼の未来の自分の失敗を見て泣くのであり、老人がライオンの夢を見ながら眠るのは、若かりし頃の自分と繋がり、彼の青春時代の熱望を表しているのではないかと思った。

少年と老人は似ていると言う。幼稚な行動をとったり、感受性豊かになったり、冒険心が増すとされている。そういう彼らを暖かく包むのは、女性たる海である。母親のときには尻を、恋人のときには気まぐれな時化を男に与える。彼は彼女らに愛され、翻弄され、生き続ける。その瞬間、少年と老人は海上に漂う船となり、一体化する。1人の「男」として生まれ変わりながら。

(おわり)

「盲人と老人と海」

私は新婚旅行で訪れた小笠原諸島の父島でシーカヤックを体験した。そこでインストラクターが言うには、古代から人間は船を使って島から島、大陸から大陸へと船で移動していた。

地図も海図も羅針盤もない頃でも大海原を旅できたのは、水先人が太陽と星の位置と、風向きから自分達のいる位置がわかっていたらしい。

水先人はイルカのように脳を半分ずつ休ませて、眠る事なく仕事をしていらしたらしい。

3日間陸地を遠く離れカジキに引き回されても全く恐れる事はなく、海の色や風を感じ、海の上は孤独でないと感じていたサンチャゴもイルカのような能力を持っていたかもしれない。

私はこの男が好きだ。

第一に自分に言い訳や自己正当化ををしない。あの子がいたらな、あれがあれば、これがあれば、と思う事はあれど自分でなんとかかしてしまう。海の上にドラえもんはいないのだ。

RPGのキャラクターは仲間を増やし、武器を強くし身につけるが老人はその逆。サメを棍棒で追っ払った。

それにユーモアがある。聖母マリアを想うフレーズに笑ってしまった。酒場で一晩中勝負が決まるまで腕相撲をしていた話もいい。

そして自分の体とカジキに語りかけるところがたまらなく格好良かった。

話は俄かに父島に戻る。私達夫婦はスターツアーという星の観察会に参加した。

目の疾患で暗い所は全く見えない私は30年の人生で初めてひとつだけ、たったひとつだけだが星を見る事が出来た。

まるで宇宙に包まれたような感覚で妻も他の参加者の方もうっとりしながらガイドの話に耳を傾け数々の星を見ていたが、私は広い広い宇宙から届いた青緑色の光を見失わないよう、5円玉の穴程の視野の中にその光だけを見失わないように留めていた。

サンチャゴも、ヘミングウェイもあの星を見ていただろうか？

ビールを飲みながら野球談義にも花を咲かせたいものだ。

(おわり)

『 無慈悲と平等 』

幼き頃、『野生の王国』という野生動物の生態を紹介する番組を観ていた。動物同士の捕食のシーンが多く、ライオンから逃げるインパラを観ながら「早く逃げて！」と手を握りしめながら声に出していた。結局、インパラはライオンに捕まるのだが「なんてひどい！」といつも憤っていた。自然の摂理も知らず、人間が捕食の頂点に立っているとも知らずに。

「自然」とは人の手が一切加わらない、ありのままの状態であると信州読書会さんの音声で学んだ。それまでは、幼き頃の自分のように、どこか人間の倫理を自然に適用しようとしていた。もうすぐ、東日本大震災から七年が経つ。大地震による津波が押し寄せ、一気に人命を奪い去ったのは周知のことだ。でも、ふと思った。亡くなった方々の中には信仰心の強い人も清廉潔白に生きてきた人も、まだ罪を知らない子供たちもいる。人間はとかく因果応報を唱え倫理社会を作り上げているが、自然の前では何も通用しない。自然は、絶対的に「無慈悲」で「平等」なのだ。

『ペスト』(カミュ著)の中で、ペストの流行は「人間の罪」のせいだとパヌルー神父はのたもう。でも、五歳の幼子が何の罪を背負って亡くなるのか。医師のリウーは、淡々とペストという「自然」と戦う。自然の前には、人間の倫理なんて何の意味もないとリウーは理解していたからだ。そんなリウーとサンチャゴが私には重なってみえた。

サンチャゴは老漁師で、84日も漁の成果がない。それでも船を出した際に巨大なカジキと出会う。そのカジキとの4日間も戦いの際、彼の自然に対する自らの委ね方にとても惹かれた。海をラ・マル(女性)といい、大いなる母性として感じているように思えた。金満家の人々がエル・マル(男性)として自然を敵視しているのと対照的だ。例え、海が荒々しく禍いをもたらしたとしても、海は月が支配しているから仕方ない考える。

戦いの相手であったカジキに対しても、どちらが殺されるかと宣戦布告はしても、同じ海に生きている仲間意識まで持つ。しかし、帰港の途中でカジキを鮫に食べられてしまう。ライオンとインパラのように、自然の中では捕食し合うしかないとわかっていても、サンチャゴのことを思うと切ない。いくらサンチャゴに肩入れしても、これが自然の「平等」なのだろう。

サンチャゴが眠りの中で見た夢が、アフリカで捕食の頂点にたつライオンであったことが、海での死闘を戦った自らを誇りに思っているように感じたのが救いだった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「貪欲な鮫」

帰港後、マストを肩に担ぐ姿が、十字架を担ぎゴルゴタの丘を登るイエス・キリストの姿にだぶった。サンチャゴは、聖ヤコブのことで十二使徒のひとり、兄弟で漁師だった。少年はその弟のヨハネ。そんなことを思った。

(引用はじめ)

「ティブロン」給仕はそういつて、今度は訛のある英語でいいなおした。「さめが、……」彼は一生懸命顛末を説明しようとする。

「あら、鮫って、あんな見事な、形のいい尻尾を持っているとは思わなかった」

「うん、そうだね」連れの男が言った。

(引用おわり)

再々読んで、このラストのシーンに何の意味があるのか？ 考えた。

この前 BS の番組観ていたら、魚もつがいで行動することが描かれていた。かつて少年と一緒に、まかじきのつがいに出会い、雌だけ釣り上げた挿話があった。雄は、最後に跳ね上がり、雌の姿をひと目見て、海の奥に消えていった。鮫もつがいで、老人の釣り上げた獲物を襲ってくる。

この老人は、妻に先立たれている。でも、漁の間、一度も妻のことを言わない。もしかすると、何度の呟いた、「あの子がいたらなあ」というのは、奥さんのことかもしれない。

でも、海(ラ・マル)は女性だ。海は嫉妬深いから、わざと少年に語りかけたのだ。

(引用はじめ)

老人は舵のところへ戻った。鮫のほうをみようともしない。それはゆらゆらと水の底に沈んでいく。最初は等身大に見え、それがだんだん小さくなっていくのが見える。そういう光景はいつも老人を興奮させた。が、いまは、見向きもしない

(引用おわり)

死にゆく醜い鮫が、海に吸い込まれていく。老人が、かつてその光景に感じた興奮。エロスとタナトスのようなもの。殺し合い奪い合って生き抜く人間の業の深さや罪を暗示している。

なぜ、観光客の女性が、マカジキと鮫を間違えたのか？ 老人は、自分をライオンとして誇るのだが、女性から見れば、彼は、興奮の雄叫び果てに、すべてを失って、海深く沈んでいく貪欲な鮫のようなものだ。

男の暗い欲望が、女としての海に吸い込まれて消えていく。

そんな人類の宿命を、皮肉っぽく描いたのだろう。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343